

### 三脚の最後

大阪(5)三脚の二頭

代名詞に付ては、物知の天下先生の三脚君が云つてあるから猿ではないが、まねをしてをく。

僕は天下先生の三脚君よりも後に生れた丈け経験も浅い。けれどもまだ新しいからキレイだ。野外へ持出されて足に土が付たと、主人はキレイにぬぐつて床の間へ書架と一緒に立てる。一體僕の處は鐵道線路の近くにあるので十分間ごとに、ヒー、ガタ／＼と汽車が通る、僕は汽車が大嫌だ。何故？何故つてあゝ爲には足を折られて不具にされたからさ。マア聞き玉へ。

日は忘れたが日曜日だった。自炊の氣樂な主人は、朝飯が済むと大きなにぎり飯を二ツ、二今日もお供だなと思つて居ると、柵から八ツ切の畫板を出す。之は昨夜水貼してをいたのだ。仕度がすむと蟹色に焼けたにぎり飯を袋に入れる。蟹とにぎり飯は縁がある。僕の主人は惻公だから、中々柿の種位とは交換せぬよ。たつた二ツと云へ共主人に取つては山海の珍味より勝る事萬々、戰地に於ける糧食その如しかね。

田舎の方へ行くと今は稻刈の盛りだ、主人は鐵道線路をつたふて行く。近いからであらるが此はあまり難有くないね、然し聲は出ぬ身體は縛られて居るのだから如何も仕方がない。やがて下された、好い處が有つたのだなと思つて見ると、近景は稻田中景は農家遠景は森と藁たばた、下へ下りて見る、地平線が低くいかぬと思つたか又上つて来て、到頭線路の堤の上に据ゑられた。氣が氣ぢやない嫌な汽車が來たらと思ふと恐しくてたまら

ぬ。主人はそんな事には一切お關へなし、ピタ／＼と筆を振つて居る。少時すると嫌に暖くなつて來たと思ふとブーンと臭氣が鼻を突く、失敬な、主人は今朝芋を食つて來たたムリで一つやつたのだ臭ツと思つて居ると又一ツ來た。主人は立つて行つた、便所なだと思つて居ると鐵橋の下へ行く水筒を持つて居るので水吸だと分つた。と思ふ間に大變な事が出來た。エライ音がするのと共に汽車が突進して來る。何が轢扱ほえる犬位なら大丈夫だが汽車では逆も敵はないまして主人は居らぬし動く事は出來ぬので覺悟をきめて居ると動搖した身體にバツタリ横様に倒れた其時だ!!!耳が聳になる様な音と共に汽車は僕の上へ——それからは無我無中。

\* \* \* \* \*

主人に助けられ我にかへつた時は頭ばかりのあはれな姿は疊の上に置かれてあつた主人の顔にも悲しそうな色が見えた。

先づ大體こんな物さ。それからと云ふもの、汽車が通る度に其の時の事を思ひ出して身振ひがするよ、不具な身故今では柵の隅に上げられて、今にも鼠の餌食になるかも知れぬ。

外にも僕の様な——迄もなく一本折れて役に立たぬ人、否三脚が少くなかうと思ふ。是等の爲に一ツ天下先生の老三脚君に御願して、水彩畫會研究所の一部に「三脚癡兵院」でも作つて貰つて氣樂に一生を送らうと思ふが、同感の三脚君は來月號で知らしてくれ玉へ。(十一月十七日稿)